

7 幕による初のハイブリッド機械式流体制御時計の創世記

I 幕

2002 年のスイス国内展示会 Expo 02 がヌーシャテル湖近在のビエンヌとモラで開催されます。ウォッチ ヴァレーの 3 つの湖のある地域で Lucien Vouillamoz は、水時計を設計するアイデアについて仲間と取り留めもなく話しています。問題は 水時計に使用されていた重力のエネルギーをどのように着用できて防水性のある腕時計に移したらよいかということです。技術的なソリューションがなかったため、ユートピアはふいに暗礁に乗り上げます。

II 幕

何年かが経ちました。Lucien Vouillamoz は相変わらずコンセプトについて悩んでいます。彼は違う角度からもう一度それを再考し、単純な水腕時計ではなく、小型で持ち運びができ、さまざまな方法で使用できる液体時間インジケータを作るという考えに至ります。この考えが彼をアイデアへ導きました。それは、2 つのフレキシブルなタンクを同一の毛管の各先端に固定して使用するというものでした。この密閉されたシステムではタンクのそれぞれに異なる色に着色された、混合不可の液体を入れます。一方を圧縮すると、その液体が毛管へ押し出されて時間を表示し、もう一方の液体が 2 番目のタンク内で減圧されます。2 種類液体の分離は、2 つの磁石のように境界点で互いに反発する、それぞれの液体の分子の陽極と陰極により保証されます。チューブ内にピストンは必要ありません。動力とサイズの問題も同時に解決しました。未来の H1 の基本的なアイデアが誕生したのです。

III 幕

アイデアはシンプルで力強いものにすべきです。Lucien Vouillamoz は潜在能力については自覚していましたが、特許にまつわる経験はありませんでした。彼は古くからの友人、Patrick Berdoz に連絡をとります。Patrick は次々と会社を起こす起業家であり、知的財産の保護と革新的なプロジェクトの立ち上げに関して経験豊富な個人投資家でもありました。コンセプトと彼のエンジニアチームとの然るべき手続きを確認後、Patrick はプロジェクトの初期認証に必要な資本を投資し、彼の専門家チームを Lucien の裁量に任せます。彼らはともに前もっての研究を行い、最初の技術仕様、最初のデザイン、最初の事前登録を作成しました。結果は見込みのあるものでした。Patrick は完全な形のこのプロジェクトに融資し続けます。それと平行して彼は友人の Emmanuel Savioz と連絡をとりました。このハイテク操業開始のスペシャリストは、HYT の設立およびプロトタイプ製造に必要な資金を集めることに携わります。Patrick は彼を HYT とその系列会社 Preciflex の管理顧問とし、協同で会社を設立すべく Lucien と自分のもとに彼を招きました。このようにして時計製造を開始するのに必要な才能を探すことが始まりました。

IV 幕

1 年の研究開発期間を経て、最初のプロトタイプが出来上がりました。時計のガラスとなる 2 層のプレキシガラスの間にサークル状に加工された 1.7 / 03 mm の長方形の毛管により、時間は正確に表示されます。回転する薄膜で作られたフレキシブルなタンクは、透明なシリンドラーの中に取り付けられています。液体の移動に必要な動力は、時計の代わりに取り付けられたカムを介して伝達されます。コンセプトが論証され、Preciflex により特許が申請されました。

V 幕

2010 年、Vincent Perriard との重要な出会い。彼は時計製造に夢中で、すでに液体を使用するという試みに関連していました。権威のある Grand Prix d'Horlogerie de Genève で、ウォッチ デザイン 2008 賞を受賞しています。この衝撃的な出会いを折よく仲介することになったのは Lucien と彼の共通の友人 Jean-François Ruchonnet です。Vincent はさらに先へ進むことを夢見ていたので、その出会いは実現したのでしょうか。彼の夢、それは Lucien Vouillamoz が彼にテクノロジーという鍵を渡してくれることです。そしてそのテクノロジーが応用された結果、プレキシガラス製の長方形の毛管は見直され内径わずか 1 mm、長さ約 11 cm の硬質耐熱ガラス製の毛管が採用されます。これはサファイアガラスとは独立した毛管で、それを通して文字通り、時が流れていくのが読み取れます。液体自体は回転する薄膜からではなく、非常に丈夫なきわめて純軟性の高いふいごから流出します (NASA でも使用されているテクノロジー)。このふいごがピストンの役割を果たし、液体を毛管に送り込むのです。プロジェクトは離陸する準備が整いました。

VI 幕

宇宙はコンセプトの証明と高級時計のはざ間にあります。未来の H1 のムーブメントを製造するため、HYT は、Jean-François Mojon と Chronode 社の彼のチームに助けを求めました。液体部分について Bruno は、Helbling Technik 社と協同で信頼性の向上と製造をコントロールしている Lucien Vouillamoz に助言をします。その後、1995 年から 2000 年にかけてのオーデマ・ピゲでの仕事に始まり、Vincent Perriard と 15 年間にわたり時計の開発に携わってきた Xavier Casals がアートディレクターとして HYT の冒険に加わります。その間、CEO で HYT のパートナーの Vincent Perriard は、未来の H1 のデザインをすでに H2、H3 および H4 に取り組んでいる Sébastien Perret が指揮を執るスタイル研究部門に委ねました。

VII 幕

オーケストラは所定の位置につきました。Vincent Perriard は Chronode 社からムーブメントを受け取り、Lucien Vouillamoz の指揮のもと、Preciflex は液体関連の部品を供給します。あり得ない 2 つの要素を組み合わせる錬金術は完璧に機能し、1 年後、初のハイブリッド機械式液体制御時計が誕生することになったのです。